

アルキド樹脂絵の具による油絵風描画の指導～印象派に学ぶ

千葉県立〇〇高等学校 〇〇 〇〇 (芸術科 美術)

1 はじめに

私は、「大人になったらデートに美術館へ出かけるような人間になって欲しい」という願いを持って美術の授業を行なっている。卒業したら美術とは無縁になってしまうのではなく、鑑賞者として美術と関わって行って欲しいということである。

鑑賞への興味を芽生えさせるためには、もちろん、「鑑賞」の授業を充実させることが肝心だが、一方で、「表現」の領域でも、題材に美術史と関係するような学習内容を盛り込んでいくことで、鑑賞への興味を喚起することはできないだろうか。例えば、ある芸術家の技法を追体験するような学習はどうか。追体験することでその芸術家の意図に触れ、その芸術家の活動に関心を持たせようというねらいである。ここで報告するのは、このような方法として、静物画の題材の中に印象派についての学習内容を盛り込んだ実践の研究である。

また、この研究では、「鑑賞」の授業を「表現」の前に配置し、「鑑賞」と「表現」を密接に関連付ける取り組みとして提示する。通例では、表現活動のまとめに「鑑賞」を扱うことが多いように思うが、あえて前に置く。これにより、「鑑賞」は「表現」の導入としての役割も持つことになる。生徒は「鑑賞」の授業で学習のテーマを見出し、次の「表現」でそれを追求し、その体験がフィードバックして「鑑賞」への関心をさらに高めるという発想である。

今回、題材として印象派を取り上げたのは冒頭の願いがあつてのことである。印象派は西洋絵画史を学ぶ一つの要だと私は思っている。印象派の技法や考え方を理解すれば、20世紀初頭までの絵画はかなり理解しやすくなると思う。それ故に、高校の美術というわずかな時間であっても、何とか印象派だけはわかるようにさせたい。昨今の印象派の人気を見ても、生徒たちが大人になって、印象派の展覧会に足を運んでくれることを期待したい。

2 油絵風の定義について

印象派を学ぶのなら油絵で学習するのが良いだろう。油絵というと実に多種多様な表現があるが、日本では、油絵といえば印象派風の絵画というのが一般的なイメージのように思う。それならば、油絵の技法を学びながら印象派を学ぶというのは自然な形だと思われる。しかし、残念ながら、油絵の具は高価なうえ道具の手入れも手間がかかり、学校の教材としては扱いにくい。そこで、油絵と同様の表現効果を得られる絵の具としてアルキド樹脂絵の具を使うことを考えた。油絵の具に代わるものとしてはアクリル絵の具が挙げられるが、比較研究の意味を含めて、今回はアルキド樹脂絵の具を用いることにした。

アルキド樹脂絵の具はアクリル絵の具と同様に水性絵の具である。生徒がこれまで使ってきた水彩絵の具のように、水をたっぷり使って描いていけば普通的水彩画となってしまう。これでは油絵のような表現効果をねらった学習とはならない。この題材で扱う「油絵風」とはどういうことを指しているのか、学習内容を整理する上でも、ここで「油絵風」を次の観点で定義

しておきたい。「油絵風」とは、①重ね塗りの効果を利用してテーマを追求した作品、②白絵の具を混ぜる量で明暗を表した作品、③絵の具により表面が盛り上がった作品、として学習するものとする。

3 画材について

アルキド樹脂絵の具は、一般にあまり知られていないので簡単な説明をしたい。アルキド樹脂絵の具のパンフレットによると、水性アルキド樹脂はアクリル樹脂と油の両方の性質を持っている樹脂で、何にでも描け、堅牢性の強い樹脂とある。アクリル絵の具と違う特徴は、油絵の具の上にも重ね塗りができるということと、再溶解性があるということにある。今回、特にこの絵の具を用いた理由は、再溶解性で比較的ゆっくり固まるという点にある。表面は約 30 分で乾き、内部は 1 ヶ月半かけてゆっくり固まると説明にある。実際に使ってみると、アクリル絵の具より乾燥は幾分遅いような印象を持った。乾燥が遅いということは、ウェット・オン・ウェットの技法や、画面上で混色していく技法が学びやすいのではないかと考えた。

支持体には紙ではなくキャンバスを使い、筆も弾力のあるやや固めのものを使用する。こうした新しい素材や道具は、生徒に水彩画とは違うということをはっきり意識させると同時に、チャレンジ精神を喚起させる効果もあるだろう。

4 印象派の表現技法を学ぶ

印象派の表現技法で特徴的なのは、「筆触分割」と「固有色の否定」(注1)である。

「筆触分割」とは、混ぜて作るべき色合いを、絵の具を混ぜないで、小さなタッチで並べ、離れた所から見たときに混ざって見えるという技法である。絵の具は混ぜれば混ぜるほど鮮やかさを失う。印象派は多彩な自然の輝きをキャンバスに再現するために、絵の具の輝きを最大限活かす方法としてこの技法を生み出した。

しかし授業では、「筆触分割」については、あえて描き方としてそのままを生徒に教えることはしなかった。理由は、作品が同じ様相になってしまうことを避けるためである。「筆触分割」という限定的な技法ではなく、もう少し汎用性のある技法として、「画面上での不完全な混色」をし、「タッチを積極的に残す」というように読みかえる。「画面上での不完全な混色」とは、混ぜるべき絵の具を筆に両方混ぜずに取り、画面の上で適度に混ぜながら載せていく方法で、タッチの中に原色の跡が残るような塗り方である。普通、生徒はパレットの上でよく混ぜて色を作ってから塗る。あるいは画面の上で混ぜるにしても、よく混ぜてムラのないようにするのが好む。そうではなく、画面に絵の具のよく混ざっていないタッチを残すようにせよということである。生徒によっては、印象派の作品を参考にして自ら筆触分割を行うこともあるが、もちろん、それはよしとする。

「固有色の否定」は西洋画の伝統を覆す発見であった。固有色とは、あらゆる物は本来決まったその物固有の色があるという考え方である。ルネサンス以来の伝統的な描き方としては、物は固有色で描かれ、固有色に明暗をつけて陰影を表した。ところが、印象派の画家たちは写生を通して自然はそうではないことに気が付いた。すなわち、物には本来固有色はなく、太陽の光や、光の反映によって様々に変化することを発見したのだ。特にカゲ(陰影)にも繊細な色彩の変化をとらえており、固有色に黒を混ぜるといったような描き方はしなかった。自然には

黒いカゲはない，カゲでも光を受けているはずだという確信のもと，印象派の画家たちはパレットから黒を追放した。（注2）

ところが高校生を見るとおおよそ固有色の概念の中にいる。絵は写真のように描かれ，固有色とそれに白黒を混ぜて陰影を表すのが良いと，ほとんどの生徒が信じている。人物を描けば，「先生，肌色は何色と何色を混ぜればいいの？」と聞く。風景を描けば，地面は茶色，道路は灰色で描かれる。しかし，この考えから抜け出なければ次のステージ（＝20世紀の絵画）へは進めない。まずは，概念くずし＝固有色の否定。これができれば，むしろ感性はもっと自由になれるはずだ。

高階秀爾著の『近代絵画史』では印象派の功績を次のように評している。「印象派の美学は、絵画の歴史の上で、色彩の表現のみならず、色彩の観念をも根底から変えてしまった。モネやシスレーは、単に黒や茶褐色をそのパレットから追放して、虹の七色を基本として描いたから印象派だったのではない。それ以上に、彼らは、形態に対する色彩の従属性を否定し（固有色の否定）、世界を色彩の輝きのみによって捉えようとした（筆触分割）点において印象派であり、そして、まさにそのゆえに、革命的だったのである。事実、印象派の登場とともに、色彩は、明確な輪郭線に規定された形態の内部を彩るだけの二次的なものではなく、それ自身で世界を構成する基本的な要素となった。色彩は「解放」され「自律性」を与えられたのである。」

注1 「太陽の光によって、明るさのみならず対象の色調も変化するというこの認識は、別の言葉で言えば、ひとつひとつの対象がそれ固有の色調を持っているという従来の伝統的な考え方の全面的な否定であった。」…『近代絵画史』高階秀爾 中公新書

注2 マネ，ドガ，ルノワールは黒色を使った。ルノワールは，ある時期，モネと同様黒を使わない作品を描いたが，後に再び使うようになる。ルノワールは「黒は色彩の女王だ。」とも言っている。しかし，「固有色の否定」を学ぶ上で，生徒が混乱しないよう，指導の場面では「できるだけ黒は使わない。」としている。

5 制作の導入としての鑑賞授業

この学習プログラムでは，制作の前に「鑑賞」の授業を置き，それを制作の導入と位置付ける。したがって，この「鑑賞」がプログラムの成否の鍵を握る場面となる。生徒は「鑑賞」で自ら学習の課題（ここでは「固有色の否定」）を見出し，制作でそれを追求する。この「自ら」という点が重要で，自ら見出したということが制作の動機付けになると考える。

「自ら」ということを実現するために対話型の鑑賞法によって授業を組み立てる。（実際の授業展開は資料①参照）この方法は，もともとアメリカの美術評論家アメリカ・アレナスの対話型鑑賞法に触発され，自分流にアレンジしたものである。

アメリカ・アレナスを知ったのはNHKで放送された『最後の晚餐ニューヨークをゆく一僕たちが挑むレオナルドの謎』（1999年9月4日放送，ETVカルチャースペシャル）を見てのことである。この番組でアレナスは小学校の子供たちに『最後の晚餐』を見せ，何の説明もなく，「この絵では一体何が起きているのでしょうか？」というように尋ねる。子供たちはいろいろなことを言うのだけど（一般的な解釈からすれば完全に間違っただけのこと），それに対し，「そうだね。」とか「そうかもしれないね。」と応え，その対話の中からさらに深いテーマへと質問を発展させていく。そして「裏切り者のユダはこの絵の中の誰でしょう？」「それはどうし

て？」という風に、子供が自分で考えるように仕向けていた。子供たちが自分で考えて話す。「聞く」のではなく「話す」という、これこそ鑑賞の理想の姿だと感じられた。

アレナスのメソッドで重要なのは対話の進め方である。この鑑賞法の研究書である『まなごしの共有』（上野行一監修）によると、アレナスの対話の秘密は〈受容〉〈交流〉〈統合〉という三つの基本的な姿勢にあるという。〈受容〉とは鑑賞者の発言に対して共感し、「そうだね。」と笑顔で同意することである。これは、「芸術は難しい」という警戒心を取り除く働きがある。発言者は自分の意見が認められて、すっかり気分は良くなるし、場の雰囲気は軽やかになる。次に〈交流〉とは、出された意見を比較し、話題の焦点を明確にし、観点を転換していくことである。自分の考えとは違う他人の意見について考え、さまざまな見解を受け入れたり解釈したりする段階である。そして、〈統合〉とはトーク進行者（教師）によるまとめである。ここでも、教師が始めから用意していた言葉を語るのではなく、鑑賞者の発言をつなぎ合わせてまとめるのである。これによって、教師が答えを与えたのではなく、「みなさんの話したことのすべてがここに入っているのだよ。」という形でまとめられるのである。私は特に〈受容〉の態度は重要だと考えている。生徒の発言はどんな意見でもしっかり反応してあげる、たとえ間違っている、「そうかもしれないね。」と言い、期待していた見解を発言してくれれば、大いに喜んで見せる、そういったことが鑑賞の態度を積極的にさせる。

アレナスは現在の鑑賞教育の問題点を、「作品の中には作家が込めた意味や理論があってそれを読み取っていくことが鑑賞であるとするような鑑賞教育の在り方にある」としている。鑑賞による感動体験は「感性を豊かにする」としながらも、結局は、作家の経歴や作品が作られた意図、時代背景や美術史的な価値といったところに帰結するように教育されることに、疑問を抱いている。芸術作品の意味というのは作者の意図とは必ずしも一致してあるものではなく、鑑賞者自身の解釈の中にこそあるとしている。このような見解から、アレナスの鑑賞は何よりもまず作品と対峙して、「見る」、そして「考える」ということを重視し、これこそ鑑賞のすべてだと考えているのである。

私の方法はこの鑑賞の態度を保ちながら、生徒の知的好奇心を揺さぶり、興味関心を高め、次の制作への意欲を駆り立てるようにしていくものである。美術史的な価値に迫る鑑賞は、鑑賞の能力を高める上で必要な教育だと私は思う。特に、知的な好奇心が旺盛で、芸術に対する理解も持てるようになる高校生では、知識欲を刺激するような方法は有効だと考える。新たに得た知識は次の学習への意欲となるからである。もちろん、重要なことは教師が知識を与えることではなく、生徒が自ら見出すようにすることである。対話式鑑賞法では、見て、考え、発見したことを、言語化し、話すことを基本とする。こうしたプロセスを通して自ら見出したことを明確にしていくのである。印象派を扱う対話では、生徒個々が、自らの言葉で考えた内容が、実は、印象派の考え方の根幹である「固有色の否定」に結びついているのだと気付かせていく。つまり、生徒は「固有色の否定」という言葉こそ知らなくても、その意味は自らが発見して得たものなのだ。

6 授業展開の実際

題材名を「松ぼっくりのある静物画～印象派に学ぶ」とし、次のような学習計画を立てた。



写真①

- (1) 鑑賞による学習課題の認識 … 1時間
- (2) 学習目標の確認と題材の内容の把握 … 1時間
- (3) 色鉛筆によるスケッチ … 4時間
- (4) アルキド樹脂絵の具による制作 … 9時間
- (5) 自己評価とまとめ … 1時間



写真②

(1) 鑑賞による学習課題の認識

ここでは鑑賞によって、モネの作品に固有色にとらわれない描き方を発見し、「固有色の否定」とはどういうことかを知るのが目的である。重要なのは生徒自らが考え自分の言葉で話すことである。

鑑賞に使用するのは、モネの『散歩、日傘をさす女』とミレーの『落穂拾い』である。後半では、モネの『積みわら』のシリーズを取り上げる。前半の2枚は屋外の人物像で、白い服を着ているという共通点があり、比較しやすいだろうと考えた。(資料①)

展開の詳細は資料②に示す通りである。おおよその授業の流れは、最初に生徒から様々な意見を汲みだし、まずは『日傘をさす女』は明るい」というキーワードが出るように対話を導く。次に、『日傘をさす女』は明るい』のはなぜ?という切込みから、「カゲが黒くない」、「一つの色であるはずの物にたくさんの色を使っている」という発見を促す。後半部分では、25点もの『積みわら』の連作から、モネの制作の動機やテーマを考える対話を行なう。

この時、生徒の意見は随時板書するようにする。中央に線を引き、左側に『日傘をさす女』に対する意見、右側に『落穂拾い』に対する意見というようにし、人目で互いの意見が対比できるようにする。

視点を与えれば生徒は固有色にとらわれない描き方を発見することができる。ただ、このような描き方がどのように素晴らしいのかということは補足して説明したい。モネの作品を見ると、その場の空気、音、においまで感じるようである。それは、モネが実際に写生に出て、感じて、描いたからであり、感じるとは、まさに五感で感じていたからであると伝えたい。(授業風景 写真①, 板書 写真②)



資料①
 左 『散歩、日傘をさす女』 モネ
 中央 『落穂拾い』 ミレー
 右上 『夕陽の積みわら』 モネ
 右下 『積みわら』の連作 モネ

資料② モネの『散歩、日傘をさす女』とミレーの『落穂拾い』の比較、対話式鑑賞法

	発問 (教師の言葉)	予想される生徒の意見	
		『散歩、日傘をさす女』モネ	『落穂拾い』ミレー
導入	(作品を提示して) この絵を見たことのある人はいますか？ (ミレーをさして) こっちは絵を見たことある人いるみたいだね、じゃあ誰が描いたの知ってる？	・知らない	・見たことがある気がする (数名)。 ・わからない
	はい、これはミレーの作品で『落穂拾い』と言います。 (モネをさして) こっちはモネの『日傘をさす女』、モネは知ってるかな、知ってる人、手を挙げて。	(1/3位は手を挙げる。モネ比較的知られている。)	
	はい、ありがとう。今日はこの二人の作品をみて、いろいろみんなに考えてもらうよ。ディスカッションしたいんだ。		
	では、まず最初の質問、みなさんこの二つの作品、どちらが好きですか？ ミレーの方が多みたいだね、でもどっちが好きかというのほどちらでもいんだ。問題はその理由、なんで、そっちの作品の方が好きと思うのかということ。ちょっと考えてみて。 はい、では「こういうところが好き」、あるいは「こういうところがちょっとヤダ」というところを見つけて。誰か言ってくれる人？	(モネの方が少ない)	(ミレーの方が多い)
展開 1	モネ派の人、少ないから頑張ってね。	好きな理由 ・明るいから。 ・色がきれい。鮮やか。 ・子供がぶらぶらしている。	好きな理由 ・写真みたいでうまい。 ・遠近がある。 ・雰囲気がある。
	みんな、いいとこ見てるね、もっと二つの作品を比較してみようか。 この二枚の絵を比較して、こんなところが違うよ、というところをたくさん探してみてください。 一人二つは探してね、あとで聞くからね、はい、じゃあ3分あげるからよく見てみて。 (3分後) どうかな、見つけられたかな、ちょっと聞くよ。	好きな理由 ・空が明るい。 ・モネは昼？ ・草や空が細かく描いてある。 ・金持ちっぽい人を描いている。 ・モネのは夏 (夏)。	好きな理由 ・暗い
	そうだね、たくさん出てきたけど、今度は、この「明るい」って意見について注目してみよう。 なんでモネの方が明るく見えるのかな。	好きでない理由 ・雑だから。(空とか草の部分)	好きでない理由 ・暗い
	うん、そうだね、もっと見てほしいところがあるんだけどね、ここ、この女の人の服を見て、『日傘の女の人』は白い服を着ているよね、『落穂拾い』も真ん中の人が白い服を着ている。この二人の服を見て気付くことないかな。	違うところ ・空が明るい。 ・モネは昼？ ・草や空が細かく描いてある。 ・金持ちっぽい人を描いている。 ・モネのは夏 (夏)。	・全体こちよっぽと薄暗い。 ・ミレーのは夕方？ ・細かいところまで描いてある。 ・農民を描いている。 ・ミレーのは秋。(注 本当は夏)
	はい、いいところに気がきました。青色だけかな？ 素晴らしい！でもなんで黄色なんだい？ そうなの？ちょっとヒントね、光って反射するよねえ。	・黄色のところもある。 ・絵の具が混ざっちゃっただけとか。	
	その通り！！たぶんそういうことだと思うよ。 そういうことって、その場に行ってみないとわからないよね、モネは写生に出かけて、その場で見て発見したんだ。 モネは、白い服のカゲに青 (水色) や黄色を使った。白い服にだよ。みんな、普通、絵を描く時にかがくは黒を混ぜないかい？モネは黒を混ぜなかった。スゴいね。	・いろいろな色を使っている。	
	あと、この草に映ったカゲも比較してみよう。モネのはどうかな。(カゲの部分拡大する)	・緑、黄緑、青、赤紫、茶色、白…	
	そうだね、たとえばどんな色が見える。	…	
	そうそう、でも何でこんなたくさんさんの色を使ったんだろう。 カゲだから暗いだけ、色を混ぜこぜにしないで、ちゃんと、カゲの中にも色の対比を作ることで、かえって鮮やかに見せているんだよ。 モネは「世の中に黒はない」って言って自分のパレットから黒を開放した。「カゲだって、どこからか光を受けていて輝いている」という信念があった。そしていろいろな色を使った。草に映るカゲでも、赤や、青や、紫や、それらが適度に混ざり合いながら、互いに響き合っている。だから明るいんだね。		
	ところで、日傘の女の人の顔を見てごらん。どんな感じに描かれている？	・なんかデキトー。	
	そうだね、目とか口とか、簡単にシャー、シャー、と描いてあるだけに見えるよね、これって人物画だよ。人物画なのに顔がデキトーっていうのはどうだい？どう思う？	・あんまり描きたくなかったからじゃないの。	
	うん、そうかもね、 じゃあ、もし描きたくなかったとしたら、他にもっと描きたいものがあつたということかなあ。 モネは、顔じゃない、他の何を描きたかったの？	・空、風 ・光とか。 ・空気、 ・雰囲気？	
	空気っていうのはいいね、 なんかモネの絵を見ていると、自分もその場にいるような感じがしてくる。目で見て感じられるようなものじゃなくて、五感呼び覚まして感じられるものがある。頬をくすぐって流れる風とか、描いてざわめく草花とか、遠く聞こえる鳥の声とか、新鮮な緑の香りとか、そういうものを感じることが出来る。こういうことって絵では大切なことだよ、目で見るだけでなく、全身で感じて描いているから、見る人にもそういうふうにならざるを得ないよ、きつと。		
	展開 2	次、もう少し違うモネの絵を見てみよう。(『積みわら』の作品を7点並べて提示) モネはね、『積みわら』の作品をこんなたくさん描きました。他にもあって、全部で25点も描いたんだって。どう思う？	・よっぽと積みわらが好きだったんだ。
そうかもしれないね、 でも、みんな、積みわらなんて美しいと思うかい？ただ、わらが積んであるだけだよ。みんなが風景画を描くとしたら、積みわらなんて描くかい？でも、積みわらをモネは何枚も何枚も描いた。きつと何か理由があって、なんか描きたいことがあって描いたんだと思うんだけど。さあ、モネは何を描こうとしたんだと思う？		・同じ積みわらでも季節によって違うということを描きたかった ・あと、天気、晴れとか、曇りとか、雪の日とか。 ・時間も。朝、昼、夕方。	
そうだね、季節や時間が変わると一体何が変わるの？ すばらしい、光とカゲがね。 モネは、よく光の効果を描いたと言われている。でも、個人的にはカゲがおもしろい、『積みわら』の作品を見ると、ほとんどが逆光で描かれている。向こうから光が来て、こっちは影が伸びている。積みわらの、光の当たっていない部分もみんな違う色で描かれている。わらなんて、たいたい黄土色だと思うけど、ここに使われているのは、オレンジだったり、緑だったり、赤だったり、紫だったり、ものすごくいろいろな色が使われていて、絵全体が輝いて見える。こういう作品を見ると、「モネはきつとこんな輝いた世界を見ていたんだなあ」と、うらやましく思う。きつとモネの見た世界は輝いていた。		・光、それからカゲ。	
まとめ	積みわらは黄土色、だから黄土色に塗る。というのを固有色といいますが、物はその物固有の色があって、その色の明暗を使って描くというのが、印象派以前の伝統的な描き方でした。だから、デッサンをして、物を立体的に表現できるように練習して、そこに固有色を当てはめていく、というのが描き方としてあったのです。みんなのよく知っている、『モナリザ』もそうです。でも印象派の人たちは、写生に出かけて、太陽の光の様々な作用を発見した。光は、ただ物を白くするだけとは考えなかった。自然の中にある物は、光の強さや周りにある物の光の反映でいろいろな色に見える。さらには、画家の感じ次第で、色は七色に分解されて、お互い響き合いながら輝きます。絵における物の色は、対象の物が何色をしているかということによって決まってくるのではなく、作者の感じ方によって変わってくる。つまり、作者が色を自由に決定してよい、ということになっていくわけです。だから、同じ物を描いても作者によって違ったものとなる。また、同じ作者でも描かれた時によって違ったものになるわけです。 みなさん、実は、今回はこういうふうにして絵を描いていこうと思っています。「物ごとの決まった色がある」というのではなく、みなさんの感じ方で、「物の中にかくさんの色を見つけ出していく」というように描いていきたいのです。		

(2) 学習目標の確認と題材の内容の把握

この時間は、前時の鑑賞を受け、実際に制作する段階への動機付けとなる部分で、丁寧な指導が必要である。

モチーフは、松ぼっくり、貝殻、壺とした。(写真③) いずれのものも赤や黄色といった原色をはっきりとイメージしにくい、あいまいな色彩の物をわざとモチーフにした。固有色にとらわれず、自由に色を発見できるように配慮したものである。

美術室の三カ所でモチーフをぐるりと囲んで描く。モチーフ台は机にキャスターを付けた手製品で、生徒が自分たちで所定の位置まで運んでくる。(写真④)

ここで、本題材の学習目標がより具体的に理解できるように過去の生徒作品を参考として提示する(写真⑤⑥⑦)。固有色を否定した描き方で、このモチーフがどのように描かれているのか確認する。特に貝殻の部分に注目させ、本来アイボリーのはずなのに、いろいろな色を使って描かれていることに気付かせる。また、作者によって同じモチーフを描いても色や描き方が随分違うことを指摘する。固有色にとらわれないで描くということは、自分が感じた色で描くということであり、作者の感じ方しだいで表現は様々になってくることに気付かせる。写真⑦のような作品を参考作品として示すのには意味がある。この作品は形が上手に再現されておらず、生徒には一見下手な作品として映る。しかし、本題材の目標である「固有色の否定」から導き出された表現であり、色は自由で、タッチは力強く、作者の感動を伝える表現であると評する。形は拙くても一生懸命描かれた作品には感動させられる。納得いくまで何度も形も直し、色を塗り重ねていくことの意義を示しておきたい。



写真③ モチーフのひとつ



写真④ 授業風景



生徒作品 写真⑤



写真⑥



写真⑦

(3) 色鉛筆によるスケッチ

薄紅色と水色の二種類の画用紙を用意し、生徒はどちらかを選んで色鉛筆でスケッチをする。このスケッチのねらいは主に二つある。「白を使うこと」と「同じ色の一つの物に様々な色を使うこと」である。

油絵風に描く時に重要になってくるのは絵の具の白の使い方である。生徒が今までやってきた水彩画では、普通は白い画用紙に描かれる。その場合、大抵は紙の白さを活かした色彩表現となる。例えば、空を描こうという時、青に白を混ぜて空色を作ったとしても、水をたっぷり使って紙の白さを活かして塗る。しかし油絵風ではそうはしない。作った空色の白さをその

まま空の明るさとして表現する。つまり、明るさの加減は混ぜる白の分量で決めるということである。生徒はこういう白絵の具の使い方にあまり慣れていないため、始めは大変戸惑うことが予想される。そこで、白を使うことに少しでも慣れるために、まずは色鉛筆でやってみようということだ。

まず、鉛筆でおおよその輪郭が描けたら、光を受けている部分を白色鉛筆で表現する。白で描くということは光を見るということである。今までのように鉛筆でスケッチしていけば、これはやはりカゲを追っていくことになる。これまでカゲをつけて物を立体的に表すというのは、生徒にとっては当たり前のことであった。(カゲの方は把握できても、光が当たって明るい所というとはわからない生徒もいる。)しかし、今回は光を追う。光があつてこそ物が見えているということに自然と気付いていく。

白による描写も適度なところで止め、今度は自由に色を使って描く。ただし、黒は使わない。また、一つの物を1色で塗りつぶすような塗り方もせず、2～3色の短いストロークを重ねるような方法を指導する。色鉛筆は混色が難しく原色を塗り重ねることになるが、それが、「固有色の否定」と「画面上での不完全な混色」の練習となっている。生徒作品で貝殻に使っている色を見てみれば分かる通り、人によって、赤茶、青、黄緑、紫など様々な色による描写がみられる。(写真⑧)



写真⑧ 色鉛筆のスケッチ

(4) アルキド樹脂絵の具による制作



写真⑨ 色ジェツソを塗る

最初に、キャンバスに、薄紅色もしくは水色の下塗りをする。下塗り材はジェツソに混色して色を付けたものである。(写真⑨)次に鉛筆でおおよその形を描いたら、色鉛筆のスケッチの時と同様に、白色で明るい所を描き、すぐに自由な色で塗り始める。パレットには白と他3～4色は出しておくように指示しておく。

制作の初期の段階での指導は、主に絵の具の扱い方、塗り方である。黒板には「固有色にとらわれない描き方」「画面上での不完全な混色」と常に明示しておく。「画面上での不完全な混色」は「筆触分割」の技法の読み替えであるのは前述の通りである。「画面上での不完全な混色」については実演して示す。この方法では画面にムラができ、生徒は一様に嫌がるが、「ムラはデザインでは良くないが、絵ではタッチと言ひ、その作者にしかできない個性となるわけで、むしろ積極的にタッチを残さない。」と、熱く語ることでそれを促す。(写真⑩)

また、絵の具の厚塗りの効果についても語る。厚く盛り上がった画面は、普通に色が綺麗であるとか、形が整っているということとは別の感動を人に与える。それは、絵の具の物質としての存在感が対象物の存在感と呼応して、我々の感



写真⑩

覚に表現の強さとして感じられるものである。授業では、「厚塗りによって物が存在感を持って強く表現できる」とか、「作者の思いや感情が絵の具の厚みに閉じ込められて、我々に訴えてくる」というような表現で説明する。

その他、「筆の弾力を使って、絵の具を筆に乗せて画面に置いてくるような感じ」とか、「白は常にパレットに置き、明るさの調整は白を混ぜる量で決める」など、具体的に説明する。また、「感じる」ということについても具体的な言い方で説明する。「よく見て感じて、例えば、カゲの部分で冷たく感じたなら寒色系の色を使ってみる、温かく感じたなら暖色系の色を使ってみる」、「貝殻のグレーの中にも如何にたくさんの色を感じる事ができるか」等、いろいろな言葉を投げかけておく。感性を言葉で伝えるのは難しい。でも、たくさん言葉を投げかけておくと、生徒は自分なりに解釈して独特の表現へ至る。(写真⑩)

制作の中盤では、生徒の多様な表現を褒めて認めるような指導にする。毎回の授業の導入で、制作途中の作品を4点ぐらいつ取り上げ、その良さを紹介する。生徒には刺激になり、「そういう描き方もあるんだ」という、より自由な制作態度へ勇気付けられることにもなる。

終盤では、自作の表現の確かめを行う。①タッチはあるか、②下に塗った色が見え隠れして効果をあげているような所はあるか、③絵の具を盛り上げて表現を強めているような所はあるか、④絵全体がたくさんで輝いているか、というような項目でセルフチェックをさせる。そして、「それは全部良いことなんだよ。」と言う。これは、言うなれば自己肯定の時間である。生徒は今までにやったことのない表現に挑戦してきている。それは新しい自己の表現であるともいえる。それを「よし」と認めることでこの課題は完成する。(写真⑪)

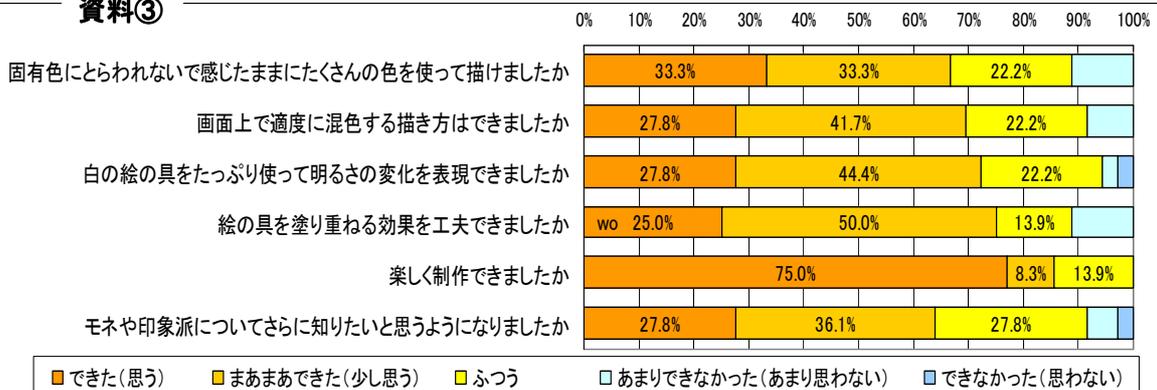


写真⑩ 制作途中

(5) 自己評価とまとめ

最後に「自己評価と感想」のプリントを書かせる。自己評価は5段階で評価してもらった。

資料③



「固有色にとらわれなくて、感じたままにたくさんの色を使って描けましたか？」という質問に対しては、66.6%の生徒が「できた」「まあまあできた」と回答している。「画面上で適度に混色する描き方はできましたか？」という質問に対しては、69.5%であった。学習の成果は良好と考えられる。また、「楽しく制作できましたか？」という質問に対しては、83.3%が「楽しかった」「まあまあ楽しかった」としており、生徒の満足もうかがえる。(資料③)

感想では、「始めは慣れなくて難しかったが、徐々にうまくいくようになり、楽しかった。」という内容が幾つも見られた。その他、注目すべき好意的な回答を次に列挙する。

「壺は（青いのに）光の当たり具合によって、緑に見えたり白に見えたりする所があつて、緑に塗ってもいいのかなと思った。」「カゲになっている所を微妙に明るくしたり、物に反射して映っている所の色を調節するのが難しかった。」「色は何色も重ねることで、いろいろな色を作ることができ、色は無限にあることを学ぶことができた。」「色を混ぜるのではなく、置いていくという発想がとてもおもしろく、描くにつれて色が重なっていくのがとても楽しかった。」「固有色にとらわれなくて描き方は、不完全な混色による描き方と組み合わせると、より綺麗になると思った。」「固有色の否定では、自分で考えて色を使うので、自分にしか描けないような絵ができると思った。」「絵の具をたくさん筆に乗せて、立体的に塗り重ねるのが楽しかった。」「こういう描き方もあるのだと知り、印象派に興味を持った。」



・貝殻は繰り返し厚く塗り重ねている。



・背景は赤かったが緑で塗りなおした。



・温かみを出すのに壺にも黄色を使った。



・全体に緑にして独特の雰囲気を出した。



・貝殻は原色が散りばめられている。



・貝殻のピンクが美しい。



・壺や背景に繊細な調子をつけている。



・貝殻には印象派のようなタッチがある。



・昨年の作品。下地にモデリングペーストを施す。アクリル絵の具による。

写真⑫ 完成作品

7 題材の評価規準

	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	・印象派に学ぶ油絵風の表現という、経験のない表現方法に関心を持ち、主体的・意欲的に取り組むことができる。	・対象を、感受性を働かせてとらえ、固有色にとられないで、色彩豊かに表現できる。	・アルキド樹脂絵の具の特性を活かし、重ね塗りやタッチなど油絵風の描写を工夫できる。	・テーマの違いや技法の違いなど、よく見て発見し、自分の言葉で発表することができる。 ・人の作品や自分の作品の、よさや美しさを発見できる。
学習活動における具体的評価基準	・積極的に自分の感想や考えを発表できたか。 ・積極的に新しい表現技法に挑戦しているか。 ・感じるままに色彩豊かに表現することを楽しんでるか。 ・制作に集中し、テーマを追求する態度で粘り強く取り組めたか。	・固有色にとられることなく、自らの感受性を持って対象を見つめ、色を発見し、豊かな色彩表現ができたか。 ・自らの作品の中に色の対比や調和を見出し、感じ、それを活かすための芸術的な表現の工夫がなされているか。	・厚塗りや重ね塗りの効果を利用して力強い表現をしているか。 ・筆の弾力を活かしたタッチや、絵の具のかすれなどによる、個性的な表現を追求しているか。 ・色の調和や対比を考え、色彩豊かな表現を追求しているか。	・テーマの違いや技法の違いなど、作品から読み取り、発見し、自分の言葉で発表できたか。 ・他人の意見を良く聞き、自分の考えと比較しながら認め合うことができたか。 ・人の作品や自分の作品の、よさや美しさを発見できたか。

8 今年度の取り組みを振り返って

今年度の題材の指導に当たって、昨年度の反省を基に、新たに試みた点を整理する。新たな試みは主に以下の4点である。

- ①鑑賞の作品提示をプロジェクター投影で行なったこと
- ②アクリル絵の具からアルキド樹脂絵の具にしたこと
- ③色画用紙に色鉛筆のスケッチを取り入れたこと
- ④モデリングペーストでの盛り上げ下地を止め、有色のジェッソで下塗りをしたこと

①については、機器を使うことで、生徒の集中力を高めることができたことが良かった。また、図像が大きく投影できることが良い。扱いづらい点もある。図像の一部を拡大すると解像度が悪くなり、かえってタッチが見えなくなってしまうことや、画像の色彩を調整しないと色が変わって見えてしまうのは困る。色彩と表現の学習をさせているのでその点が難しい。資料の画像を入手するのにも注意が必要だ。今回は絵を所蔵する美術館のホームページからダウンロードした。有名な絵では、インターネットで画像検索をすると、販売用の複製画やリトグラフ、あるいは個人のブログの写真などたくさんヒットするが、それは使えない。

②については、アルキド樹脂絵の具は、乾燥がやや遅く、画面上での絵の具の混合が無理なくできたのが良かった。乾けば塗り直しも可能であり、重ね塗りを効果的に活用することもできる。ただし、やや水っぽく溶かれており、エッジの立ったメリハリのあるインパストが作れない。

③については、とても効果的で、本制作での白絵の具の扱い方や、固有色にとられない描き方がスムーズに学習できた。1色に見えるような物も、複数の絵の具を使い、自由に豊かな

色彩表現ができた。

④については、スケッチの時の色画用紙と同じ色の下地からスタートしたので、絵の具での本制作が極めてスムーズにできた。完成作品は、繊細な色彩変化のある作品、重ね塗りや絵の具のかすれの効果を工夫した作品、タッチの軽やかな作品、細部まで描きこんだ作品など個性に富んだものとなった。ただ、油絵のような絵の具の厚みを持たせることができなかった。昨年は、モデリングペーストで地塗りをしたので、その凸凹を埋めようと大量の絵の具を使い、それが迫力のある表現として成功していた。今後の課題として、有色でモデリングペーストを使用した方法や、メディウムを絵の具に混ぜ込むような方法も、取り組んでいきたい。

9 おわりに

「鑑賞」の授業と「表現」の授業を関連付ける方法についての成果は、二つの視点から検証する必要がある。「鑑賞」の授業が、制作の導入として、制作の動機付けや学習内容の理解に役に立っていたかどうかという点と、追体験の制作をすることで、フィードバックして、印象派やモネへの関心がさらに高まったかどうかという点である。前者は、生徒の制作態度から充分効果的であったことが推測できる。指導に当たっては、制作の合間に「モネは…と考えた。」とか、「印象派は…であった。」というような話をしながら学習のテーマに迫ることができるのが良い。後者は、生徒の「自己評価」から読み取ることができる。「モネや印象派についてさらに知りたいと思うようになりましたか？」という質問に対し、「思う」「少し思う」とした生徒は63.8%であった。「ふつう」という回答も含めれば、ほぼ100%である。追体験が作家への関心をさらに高めたものと考えられる。

このような「鑑賞」と制作を関連付ける授業はこれまでも幾つか試してきた。「自画像〜ゴッホの場合」、「マティスに挑戦」、「デュシャンと現代美術〜ボックスアート」という内容のものだ。今回の研究を活かし、さらに内容の改善と題材の充実を進めていきたい。

引用写真資料

『散歩、日傘をさす女』ワシントン・ナショナル・ギャラリーHPよりダウンロード、色彩調整（永田）
『落穂拾い』オルセー美術館HPよりダウンロード、色彩調整（永田）
『夕陽の積みわら』ボストン美術館 画像元、「NHK名画への旅」講談社より複写（永田）
『積みわら』左よりオルセー美術館、シカゴ・アート・インスティテュード、ボストン美術館、スコットランド・ナショナル・ギャラリー、メトロポリタン美術館、シカゴ・アート・インスティテュード 以上6点画像元、『NHK名画への旅』講談社より複写（永田）

参考文献

『近代絵画史』高階秀爾著 中公新書
『なぜ、これがアートなの？』アメリア・アレナス著 福田のり子訳 淡交社
『みる・かんがえる・はなす』アメリア・アレナス著 木下哲夫訳 淡交社
『まなざしの共有』上野行一監修 淡交社
『NHK名画への旅 18 19世紀Ⅱ 都市のユートピア』講談社
『NHK名画への旅 19 19世紀Ⅲ 屋外へ出たカンヴァス』講談社
『巨匠に教わる絵画の技法』早坂優子著 視覚デザイン研究所